

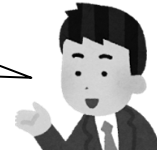
☆ 言語障がいのある子どもの理解

吃音のある子どもの理解と対応



私の学級に吃音のある子どもがいるのですが、
どうかかわっていいか悩んでいます…。

まず吃音について、どんな特性があるのか、
理解することが大切です。



【吃音】とは

自分で話したい内容が明確にあるにもかかわらず、また構音器官のまひ等がないにもかかわらず、話そうとするときに、同じ音の繰り返しや、引き伸ばし、声が出ないなど、いわゆる流暢さに欠ける話し方をする状態を指します。現在のところ、原因は不明です。

吃音の特性の理解

○ **吃音の状態には変動が見られること**

- ・ 個々の子どもの状態は、日によったり、場の状況や相手、話の内容により変動するものです。したがって、吃音のある子どもの実態把握に当たっては、本人の様々な状況での発語行動（発語に伴って生じる随伴症状も含めて）を観察し、検討しなければなりません。

○ **人や場面に対する恐怖や回避を生じやすいこと**

- ・ 自分が苦手であるとか、避けて通りたいと思っている特定の場面（音読や、電話をかける場面など）を意識的に又は無意識的に避けようとする場合があります。

○ **随伴症状がみられること**

- ・ 発語に伴って生じる身体運動（まばたきをする、体をゆする、足踏みをする、首を振るなど）についても、吃音症状が進展した子どもに特徴的なものです。

○ **社会性の発達や自己肯定感に対する影響がみられること**

- ・ 話し言葉の障がいの程度とともに、本人の吃音に対する受け止め方にも留意することが必要です。さらに、本人の感じ方を取り上げる際には、保護者や学級担任、級友等の吃音に対する感じ方、本人に対する感じ方及び態度なども考慮に入れて吃音をとらえることが必要です。



「教育支援資料」より、吃音のある子どもへの対応の仕方を一部紹介します。
自分にできそうなことから意識して始めてみましょう！

□ **自由な雰囲気ですら「楽に話す」ことを奨励する**

言葉の話しやすさは、本人の気持ちや周囲の話し方によって変化するものです。教師との間で、受容的で温かな関係をつくり、そこで子どもの自発的な行動や発言を促すことが大切です。

□ **苦手な場面や語音に対する緊張を解消する**

吃音に悩む子どもは、実際の生活の中で失敗したり困ったりした経験があり、**苦手な場面や特定の語音**に対する緊張を抱えていることが多くあります。そのため、教師との温かな人間関係の中で、苦手な場面を**想定して**特定の語音を**繰り返し練習**したり、緊張の低い場面から高い場面へと**段階的に練習**したりすることが大切です。

□ **日常生活におけるコミュニケーション態度を育てる**

「吃音は悪いことではない」ということを、学校内の人々や保護者に**周知徹底**し、吃音のある子どもが時にどもりながらも伝えるメッセージを受け取ること、話し方ではなく、**話の中身に耳を傾ける**ことが大切です。**せかさず、ゆったりと**かかわっていきましょう。

□ **本人の自己実現を援助する**

生活で失敗したり困ったりした経験により、**自己肯定感が低く**なってしまう場合も少なくありません。自分自身や吃音について話し合うなどしながら、「**吃音のある自分も大切な自分**」であると思えるよう**指導**していくことが大切です。また、**得意なことを伸ばす**などして、自信につなげていくことも大切です。

□ **周囲の態度を改善する**

吃音に対する正しい知識や情報を伝え、**保護者や担任、友人等に対して理解**を促すとともに**望ましい態度を育てる**ことが重要です。**からかいなどは許さない**ような、**周囲への指導**も時には必要です。



話し方のアドバイスをしたり、ことばの先取りをしたりするのではなく、吃音のある子どもたちが「自分で最後まで伝えることができました！」という実感が持てるようにかかわっていきたいですね。